

ジャガイモと映画（14）

<フライドポテト（3）>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

フライドポテト（アメリカのフレンチフライ、フランスのポム・フリット、イギリスのチップス）の発祥は、『11. コブラ』で書いたようにベルギーとされ、ベルギーでは、8月1日を「フライドポテトの日」にしている。これに対し、フランスの大手新聞である「ル・フィガロ」は、フライドポテトは19世紀初頭のパリでつくられたのが最初であると主張している。なお、ポテトフライは和製英語である。

53『若い女』

（原題：Jeune femme）

2017年、フランス映画。監督：レオノール・セラユ。

本映画は、監督（女性）がフランス国立映画学校の卒業制作として書いた脚本をもとに作成したものである。

パリで暮らす31歳という若い？ ポーラ（レティシア・ドッシュ）は、10年付き合ってきた写真家の恋人から突然別れを告げられる。お金も家も仕事もない彼女は途方に暮れ、その恋人の飼い猫とともにパリを転々とする羽目になる。自由奔放なため、実家に戻ろうとしても母親から拒絶される。

やがて住み込みのベビーシッターの仕事を探し出し、ショッピングモールの下着店

でも働きをみつけ、ようやく自分の居場所を確立したかに思えたが…。

ドッシュは何者にも媚びない新たなヒロイン像を体当たりでこなしている。現代に生きるすべての女性に贈る、孤独と自由、そして希望の物語である。

この映画では、フランスの“ポム・フリット”ことフライドポテトが2回登場する。

1回目は、コインランドリーでつまむファストフード店のもの。2回目は今は疎遠でソリが合わない母親の家で母親が手作りしたもの。母親は、肉の黄色い大きなジャガイモの皮を剥き、拍子木切りにしたものをたっぷりの油で揚げる（写真1）。



写真1 母親が揚げたポム・フリット

その横でポーラがボウルを抱えてマヨネーズらしきものをつくる。口数少ないが、かつての仲の良かった二人のように助け合う。

54『パルプ・フィクション』

(原題：Pulp Fiction)

1994年、アメリカ映画。監督：クエンティン・タランティーノ。

タイトルの『パルプ・フィクション』はアメリカの三文雑誌（パルプ・マガジン）から転じて「くだらない話」「意味のない話」と言うような意味を持っている。いくつかの短編が、その名の通り、すべて下らない、汚らしい人間の話であり、作中の人物は軽く殺人をやったりしている。短編ストーリーが、時系列とは違う流れで提供され、最後まで観てようやく正しい順番が分かるようになっているギャングの話である。

この映画の主人公ヴィンセント・ベガ（ジョン・トラボルタ）は、ギャングのボスであるマーセルスの部下の殺し屋である。3年間アムステルダムで働いてアメリカに戻ってくる。そして（人生最後に無防備でトイレに入ったことを除き）冷静な彼が走る車の中で会話する。ヨーロッパではメートル法が進み、アメリカとは違う生活習慣があると、やや高慢に、いろいろ並べたてていくシーンにおいて、（写真2）



写真2 ジョン・トラボルタ（左）が語る

「ところでお前、オランダではな、フレンチフライにケチャップをかけないんだぞ」

「じゃあ、何を掛けるんだ？」

「マヨネーズ」

「嘘だろ、おい」

「この眼で見たんだ。それもな、皿の端っこにチョコッと置くんじゃないくてさ、マヨネーズの中にフレンチフライをドホッと浸けちまうんだぜ」

フレンチフライに何を掛けるか。これは国によって大きな差がある。アメリカでは圧倒的にケチャップであり、本シリーズ『11. コブラ』のシルヴェスター・スタローンが、トマトケチャップを掛けた女に「フレンチフライが溺れている…」と話すシーンがある。オランダではこの映画のマヨネーズやインドネシア風サテソース（ピーナッツ風味の甘いソース）が好まれ、イギリスではケチャップ又は脂肪を減らす効果のある酢の一種のモルトビネガーかタルタルソースであり、総じてソース系を掛ける国が多い。

55『恋愛小説家』

(原題：As Good as It Gets)

1997年、アメリカ映画。監督：ジェームズ・L・ブルックス。

マンハッタンに、言葉だけならどんな美しい愛だって語れる小説家メルヴィン（ジャック・ニコルソン）がいた。しかし実際の本人は、不器用で、異常なまでに潔癖であり、神経質の嫌われ者である。周囲に毒舌を撒き散らし、友人は誰もいない。

行きつけのレストランでも、勝手に自分のテーブルを決めていて、そこに先客がいれば、追い出し、持参した使い捨てのナイフ・フォークを使う。朝食は「卵3個の目玉焼き、ソーセージにフレンチフライ、パ

ンケーキにコーヒー、砂糖はダイエットシュガー」と決めている（写真3）。



写真3 ソーセージとフライドポテトを注文

ただ、離婚して喘息もちの子供のため精一杯働いているウェイトレスのキャロル（ヘレン・ハント）にだけは素直になっている。

隣のゲイのサイモン（グレッグ・キニア）が借金から破産したため、昔彼を放逐した両親に金を借りに行くことになり、メルヴィンとキャロルも子供の喘息が快方にあることから同行することになる。

これを機会に、二人の初デートが成就し、上着にネクタイがないと入れないレストランに入る。そこで、「カニ料理スペシャル2人前! ビールも」。ポテトは? とキャロルに同意を求めてから、「バイクド・フライズ」（字幕スーパーは「ポテトフライを付けて」）と注文する。これが筆者期待の2つめのシーン。

サイモンに「恥をかいてもいい、捨て身で当たれ」と押し出されて、早朝キャロルに会いに行き、「この世で僕だけが君が最高の女性だってこと知っている。それが僕の誇りなんだ。」と告白してキスするとパン屋さんの灯がともる。原題は「これ以上はない最善」という意味の慣用句である。

56『イーディ、83歳はじめての山登り』

（原題：Edie）

2017年、イギリス映画。監督：サイモン・ハンター。

子どもを育て、30年間にわたり夫の介護で過ごしてきたシニアのイーディ（シーラ・ハンコック。撮影時83歳）は、娘から老人施設への入居を勧められている。ある日、町のフィッシュ&チップス屋で追加オーダーが可能か尋ねると、店員が「何も遅すぎることはないさ」と笑顔で答える（写真4）。



写真4 「何も遅すぎることはないさ。」

そのイギリスで人気のチップスことフライドポテトは暖かくておいしそう。店員のこの言葉に刺激を受け、スコットランドのスイルベン山に登ることを決意する。

夜行列車で偶然出会った地元の登山用品店の青年ジョニー（ケヴィン・ガスリー）をトレーナーに雇い、山頂を目指すため訓練を始める。最初は誇り高く頑固なイーディは衝突を繰り返すが、彼の丁寧な指導を受け、人に頼ることの大切さも学ぶ。かくて、初登山に心をときめかせる少女のような初々しさを胸に秘め、準備を整えたイーディは、ついにスイルベン山に向かう…。上品な彼女のジョニーとのかけあいも見られる。